

一死の一人を
北月負って

私の人生を変えた第五福竜丸

大石又七

新潮社



死の灰を 背負で

私の人生を変えた第五福竜丸

大石又七

新潮社

死しの灰はいを背せ負おつて

——私わたしの人生じんせいを変かえた第五福竜丸だいにふくりゅうまる

一九九一年七月五日 印刷

一九九一年七月一日 発行

著者 大石又七おおいまたしち

編者 工藤敏樹こうとうとしき

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部）03—三二六六—五一—

（編集部）03—三二六六—五四—

振替 東京四—八〇八

印刷 株式会社三秀舎

製本 加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。



©Matashichi Oishi & Toshiki Kudo 1991, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-381301-6 C0095

死の灰を背負って ■ 目次

はじめに——鈴木さんの法事 7

I 被爆

謎の閃光 12

運命の船出 21

白い灰 31

焼津へ帰港 37

国立東京第一病院へ 46

久保山局長の急変 58

病室で迎えた成人式 74

II 生いたち

ふるさとの海と船 78

「神国日本」の子どもたち 86

頭上のB 29爆撃機 95

敗戦と父の死 100

十四歳の漁師 108

南洋できいたワルツ 115

III 東京へ

漁師からクリーニング屋へ 122

三人の誓い 132

被爆者の涙 135

夢の島の第五福竜丸 141

よみがえった「廃船」 148

IV 新たな航海

「ラジオ日本」への投稿 154

たかが模型船されど模型船 160

お母さんたちのパワー 169

高校生とビキニ事件 174

仲間たちは次々と天へ 188

あれが東京ドームだ 205

原子力と原子病 211

おわりに——高木さんの死 219

あとがき 225
・ 編者あとがき 228

死の灰を背負って

——私の人生を変えた第五福竜丸

はじめに——鈴木さんの法事

一九九〇年（平成二年）四月二十二日の日曜日、約束の午前十一時に三十分も早く着いてしまった。

中央線中野駅北口に降り立つと、道路をへだてた向こう側には商店街のアーケードが、人の列を誘い込むように、こちらを向いて大きな口を開けている。

時間の余裕が、無意識のうちにその方向に足を運ばせた。

すぐ左側を通っている縦の大きな道路の向こう側には、都会の真ん中とは思えないような広い緑の空間があつて、その中にニョキッと四角な細長い箱を立てたような、黒っぽいビルがそり立つているのが目に入った。

十五、六階はあるだろうか。

「花の万博、メディアボックス中野、ハイビジョン放映中」

ビルの上の方の窓に、白くはつきりと文字が浮かび出ている。

ハイビジョン、名前だけは聞いているがまだ見たことはない。行ってみよう。

正面玄関を入るとききれいな受付嬢に愛嬌よく迎えられ、遊牧民のテント小屋のような黒い幕の

中に入った。ミニ映画という感じで、百二十インチという画面が目飛び込んできた。

「うーん、鮮明、鮮やかな色、噂どおりだ」。画面の中から花博のコンパニオンが、笑顔で大阪に誘う。

日曜日のせいか、行きかう人びともゆつたりとした感じで歩いていた。

駅に戻ると、見覚えのある顔がもう改札口の前でひとかたまりになって、挨拶をかわしている。

「やあ、どうも大石です」

六、七人が一斉に俺の方を見た。

亡くなった鈴木隆さんの長男で、鈴木さんの仕事のあとを継ぐことになった息子さんは、みんなの仲をとりもつようにして、これから向かう曹洞宗天徳院の場所を説明した。早稲田通りを新宿の方に向かって二キロくらいということだった。

今はそれぞれの人の胸の中に、それぞれのかかわり方の大きさだけで描かれる人となってしまった鈴木隆さん。

「あれからもう一年たってしまったなんて、とても思えないですよ」

長男である息子さんは、ハンドルを握りながらいった。

車にはお嫁さんのお母さん、今年大学を卒業したという次男の弟さんも同乗していた。

一年の月日は、苦悩戸惑いのあのときの顔もいつしかやわらげて、かわす挨拶にもときどき笑みがまじったりした。

四月二十九日の一周忌を前に、十一時半からごく身内の十六人で行われた法要は、しめやかな

うちにも滞りなくすんだ。

「最後のお経のところで、隆が出てきたつけよ、本当だよ。わしゃあ、靈感が強いようで、ときどきこんなことあるだろう」

俺の前にいたいちばん上の姉さんが、隣に坐っている妹さんらしい人に顔を近づけて話していた。

義節隆彰居士。

鈴木隆さんの、向こうでの名前だ。

俺にはまだその名前になじむことも、理解することも、納得もできていない。

鈴木さんは七人兄弟の下から二番目、ほかの兄弟はいまも全員健在である。

みんなゆつくりとした足取りで本堂を出た。

「今日も降ってきちゃったよ。隆のときはいつも雨だなあ。葬式のときも、墓参りのときもそうだったもんなあ」

振り返りながら、あとに続くみんなに向かって三番目の兄さんは言った。

「もう終わっちゃったことだけだな。入院中に隆の嫁と二人で先生に聞いたことあったつけよ」
会食の席で、鈴木さんの二番目の兄さんが話しかけてきた。

「隆の病気は、あの水爆、死の灰とかいうのに関係あるのかねえって聞いてみただよ。『私の口からそのことは言えない』、先生はそう言ったつけよお」

死の灰——。

何度も何度も聞かされ脅かされて、忘れようにも忘れることのできない、おぞましい言葉だ。

思い返せば三十六年前のあのとき、俺たち第五福竜丸が南太平洋のビキニ海域から持ち帰った、あの小さな白い粉。

二ミリにも満たないサンゴ礁のかけらが生んだ、それは重い言葉である。

I
被
爆

謎の閃光

夜明け前の静かな洋上に、稲妻のような大きな閃光が、サアーツと流れるように走った。

午前一時からはじまった投縄作業が、ついでしたが終わり、ひと区切りついた体を船室の戸口に近いカイコ棚のベッドに横たえて、開けっぱなしになっている暗い外をぼんやり眺めていた。午前三時三十分、船はエンジンを止め、かすかな風に流れをまかせている。

さっきまでの、目の回るような忙しい作業と騒音が、うそのような静けさだ。

閃光はそのときである。

光は、空も海も船も、真つ黄色に包んでしまった。

はじかれたように立ち上がり、外へ飛び出した。きよろきよろと見回したが、どこがどうなっているのか見当がつかない。左の空から右の空まで全部黄色に染まって、まるでこの世のものは思えない。

ブリッジ左舷のボートデッキに、船頭（漁労長）の見崎吉男みさきよしおさんらしい人影が船の位置を測っていたのか、のぞいていた六分儀から目を離れたばかりという格好で、じつと左舷の水平線を見つめて立っている。すぐ後ろに棒立ちになっているのは、船長の筒井久吉みづうきちさんのようだ。

かめのこ（魚槽）のふたに飛び乗り、同じように左舷を見た。一段と鮮明な黄白色が大きな傘状になって、水平線のかなたで無気味な光を放っている。

「あそこだ」

「なんだ、あれは」

声にならない。心の中で叫んだ。

今にも、どでかい太陽が昇ってきそうな感じた。

らくの間（船首側にある船室）から俺のあとに続いて出てきた仲間たちも、

「なんだ、なんだ」

次々とかめのこのふたに飛び乗り、顔をならべた。

艦（船尾）からも、機関場からも、転がりそうになってみんなあわてて出てくる。

光は微妙に色を変えた。黄白色から黄色、オレンジがかって、かすかな紫色が加わり、そして赤く変わっていった。それも少しずつ少しずつ、ゆっくりと。

だれもが無言で息をこらし、立ちすくんだまま、目はその光景に吸いつけられるようにじっと成り行きを見守っていた。

一九五四年（昭和二十九年）三月一日午前四時十二分。南太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁北東約九十マイル（約百七十キロ）、北緯一度五三分、東経一六六度五八分。

俺たち第五福竜丸乗組員二十三人は、公海でマグロ漁を操業中、ビキニ環礁でアメリカ軍が行ったとてつもなくどかい水爆実験に遭遇してしまった。乗組員の運命は、このときからそれぞれ異なった二十三の方向に大きく変えられ、苦難の道がはじまったのである。

呆然としたひとときが過ぎて我に返ると、すぐに恐怖が襲ってきた。何かが起こっている。だが距離はかなりありそうだ。そう思いながらも、異様な雰囲気^{きふき}に気持は落ち着かない。

「急いで揚げ縄だ。みんな縄を揚げるぞう」

不安と動揺に包まれ、静まり返っていた船の中に船頭の大きな声がひびいた。船頭の声にもいつもの安定がない。縄はいま入れたばかりというのに、それどころじゃないと、そんな感じだ。船頭もこの事態を深刻にみて、あわてたようだ。あわただしく揚げ縄の準備にとりかかった。

ちょうどその時、賄^{まか}い係の竹^{たけ}さんこと服部竹治^{たけじ}さんが「朝めしができたよう」と言いながら、ブリッジの右端の窓にぶらさがっている鐘を、チャランチャランと鳴らした。竹さんは乗組員の中でも年長者（三十七歳）で、この航海からはじめて乗船してきた、やせ型のおとなしそうな人だ。

俺は、船の艙にある賄いの方へ急いだ。機関場の横を通り過ぎようとしたとき、エンジンが勢いよくかかり、丸窓から中のあわただしい動きが見えた。機関場から何人かが、朝めしを食いに上がつてきた。

八畳ぐらいの広さはあるだろうか、船の一番後ろにある艙のデッキの真ん中に、おひつがおかれ、その横にたくあんがアルミの食器に山盛り^{さんざん}にしておいてある。ケッチ柱（船尾のマスト）にくくられた作業灯が、それらを明るく照らし出していた。みそ汁も、てんでに釜からよそつてきて、ロカイ（釣台）のふちや、おひつのまわりに、車座になって食べはじめた。海はもとの暗闇に戻ったが、やけに静かだ。さっき見た光景をそれぞれ頭の中で思いめぐらしているのか、だれもしやべろうとしない。